

平成23年報恩講ご縁 ご法話原稿 Ver.4 「本願力廻向と悪人正機と」

本願寺派布教使

〒520-0501滋賀県大津市北小松452番地

(「タウンページ 滋賀県 「大津市 正覚寺」でご検索下さい)

正覚寺愚住 堅田 玄宥

目次

1. 本願力廻向

- 1) 本願力廻向(ほんがんりきえこう)のお謂(いわ)れ
- 2) 信心獲得(しんじんぎゃくとく)の構造
- 3) お喚(よ)び声に遇(あ)わせて戴く
- 4) 聞其名号(もんごみょうごう)で何ゆえ歡喜(かんぎ)するのでしょうか
- 5) 阿弥陀様のお聲(こえ)聞く

2. 悪人正機(あくにんしょうき)(唯除(ゆいじょ)の御文(ごもん))

- 1) 五逆(ごぎゃく)と誹謗正法(ひほうしょうぼう)
- 2) みなもれず往生すべしと知らせんとなり
- 3) 涙君なつかし(慚愧(ざんき)歡喜の涙君)

本願力廻向のお謂れ (1/2)

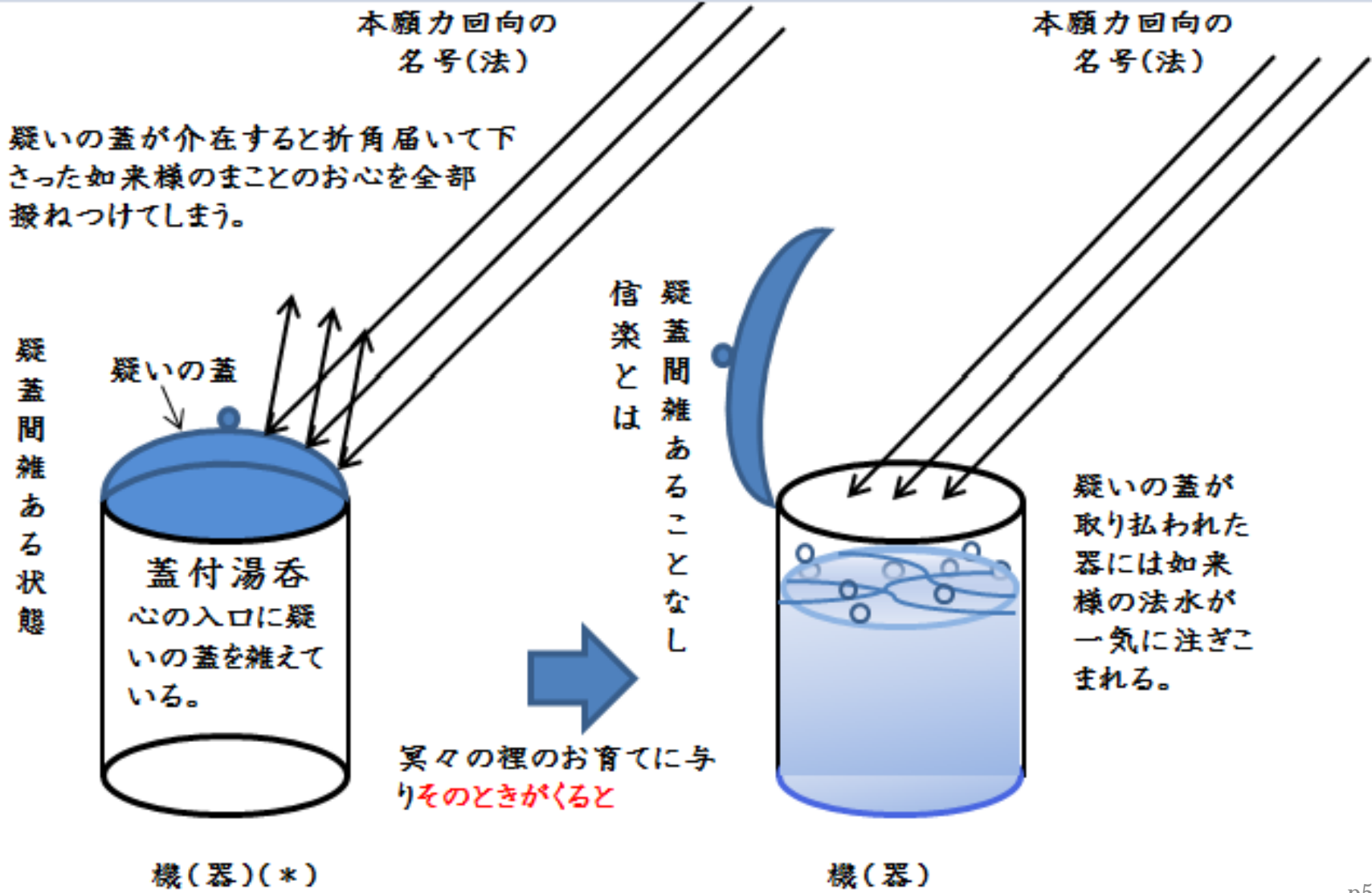
設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法 設ひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜん^と欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と逆誹謗正法とをば除く。

- わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じてわたしの国(浄土)に生まれたいと願ひ、わずか十回でも念仏しても生まれることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗る者だけは除かれます。
- ところが、凡夫(私)には、“心から信じて浄土に生まれたい”というような殊勝(しゅしょう)な心は起こりえようがありません。
- そこで、如来様の方で、すべて成就して下さった真のお心(本質はお名号)に基づいて“お願いだからわが国浄土に生れておいで”と願うて下さり、これに対して、疑いを差し挟さず、さようでございますかと仰せの通りにお任せするのが“信心(しんじん)”であり、“たとえわずか十遍でもよいから南無阿弥陀仏と称えておくれ”との如来様の仰せに従って 南無阿弥陀仏と称えるのが“行(ぎょう)”であります。
- 浄土真宗(本願力廻向(ほんがんりきえこう))とは、行も信も如来様の本願力によって衆生(私)に施し与えていて下さる謂れなのですから、仰せの通りに、南無阿弥陀仏と称えるとき、直ちに如来様のお喚(よ)び声にあわせて戴けるのです。

本願力廻向のお謂れ (2/2)

- 疑わなければ、心の蓋が開き、如来様の真実心が飛び込んで下さり、そのまま私の功德となってお宿り下さいます。如来様から賜った功德は、金剛心、大菩提心となってお宿り下さるのです。
 - その瞬間、衆生は、今生では、現生正定聚(げんしょうしょうじょうじゅ)の身となり、浄土往生すれば、直ちにお悟りを開くことができました。
 - それは、あたかも、天空の月が池の水面に映るようなものであります。
 - 法然聖人は、これを
 - 「月影の至らぬ里はなけれども ながむる人の心にぞすむ」とお歌い下さいました。
 - 親鸞聖人のお心で頂戴しますと、如来様の仰せの通りにご本願に誓われたお念仏を称える人の心にだけ月の光は宿るということになります。
 - 如来様の願いの通りに(疑いをさしはさまず)というのが信心正因のお心だったからです。
 - 利井鮮妙和上は、
 - 「左文字、押せば右文字助くるの ほかに助かる道なかりけり」とお歌い下さいました。
 - 衆生は、お名号(救いの名告り)をお聞かせに与ってお救いに与ります(成就文)。
- ここで一つ疑問が生じます。
- 成就文には「聞其名号」とあるのに、何故、願文には「乃至十念」とお誓い下さったのでしょうか。
 - それは、間違いなくお喚び声をお聞かせに与れるよう本願文に「乃至十念」とお誓い下さった法蔵菩薩のお手立てと頂戴することができるのであります。
 - 宗祖は「謹んで往相廻向を按ずるに大行あり、大信あり。大行とは、則ち無礙光如来の名を称するなり。」と仰せですから、南無阿弥陀仏と称すること自体(仏の口業)が本願力廻向の賜物なのでした。

信心獲得の構造



お喚び声に遇わせて戴く

- 1) あなたが初めて赤ちゃんを賜ったときのことを思い起こしましょう。
 - 赤ちゃんにお名前を付けたときからあなたはあなたの赤ちゃんの名を呼び続けたのでした。
「お母(父)さんだよ、あたしだよ」といって
 - その呼び声に初めて赤ちゃんが反応してくれたとき、あなたはどんなに嬉しかったことでしょう。
- 2) あなたがこの世に赤ちゃんとなって誕生したときに思いを馳せましょう。
 - あなたの父母が最初になさったことがあります。
 - それはあなたにお名前をつけ、その日からあなたのお名前を呼び続けて下さったことでした。
「お母(父)さんだよ、あたしだよ」といって
 - その呼び声にあなたが初めて応えたとき今は居ません父母はどんなに喜んで下さったことでしょう。
 - そのとき、私はどんなに安心したことでしょう。何しろ、眼差しを込めて呼び続けて居て下さる両親に恵まれたのですもの
- 3) それでは、阿弥陀如来のお喚び声に遇わせて戴きましょう。
 - 如来様が乃ち十念に至るまでと願っていて下さるのですから、如来様の願いの通りに、ご一緒に“南無阿弥陀仏”と称えましょう(念仏)(Ref:第十八願文「乃至十念」)。
 - 称えれば、“南無阿弥陀仏”と聞こえて下さいます(Ref:第十八願成就文「聞其名号」)。
 - これは、唯今お浄土を発して届いて下さった如来様の「ワレニマカセヨ」とのお喚び声だったので、
 - なぜなら、如来様のご本願の通りにお取り次ぎし、皆様は誠に素直にお念佛なされたからです。
 - そのようにお喚び声をお聞かせに与るとき、如来様はどんなにお慶び下さることでしょう。
 - それは、弥陀正覚と衆生往生が一つのものとして誓われたものが本願だったからです。
 - ここで、“如来様の願いの通りに”というのが浄土真宗の信心だったのであり、
 - 如来様のこのお慶びが、そのまま私の安堵感になっているのであります。

聞其名号で何ゆえ歡喜するのでしょうか (1/2)

人は、お名号をお聞かせに与れば、何ゆえ、信心**歡喜**するのでしょうか。

ところで、聞くことは、そのまま信心なのでした。(Ref『一念多念証文』註釈版P678)

本願を聞きて疑ふころなきを「聞」といふなり(聞の第一義)。

「疑ふころなき」は、信心そのものですから、信を以て聞を定義されたこととなります。次に

「きく」といふは、信心をあらはす御のりなり(聞の第二義)ですから、

聞を以て信心を定義されたことになり、聞と信とは必要十分条件の関係にあり、「聞即信」となります。

そうしますと、聞其名号、信心歡喜と成就文にあるも、聞と信が一つですから

課題は、お名号をお聞かせに与れば(=疑う心なければ=信心)何ゆえ歡喜するのでしょうか

ということになります。

聞の対象は、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞といふなりとあることからすれば、御本願のお謂れをお聞かせに与って疑いなく頂戴することであります。

一方、ご本願は既に完成してお名号になって直接働いて居て下さることでありました。

どのようにしてかと問えば、行巻の六字釈にありますように、「本願招喚の勅命」となって迫って下さるのでした。

聞其名号で何ゆえ歡喜するのでしょうか (2/2)

お名号は、まず、名聲(名の聲)となって迫って下さるとあります(重誓偈)。

そうすると、課題の問は、本願招喚の勅命に喚び覺まされるとき、人は、何故、歡喜するのでしょうかとなります。

一体、何ゆえでしょう。

親子の関係性に目覚めるからであるというのは一つの回答ではありますが、

目覚めるという自動詞が気掛かりです。如来様によって目覚めさせられるというのが本願力廻向の本質だったからです。

これに対するお答えは、教文類の宗祖のお言葉に回答のヒントが潜んでいるかと思われませんが如何でしょう。

“謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり”(Ref「教文類」、註釈版聖典P135)。

しかして、歡喜は、如来回向された「証」の一つの側面ではなかったでしょうか。

してみれば、お名号をお聞かせに与った衆生が何故に歡喜するのかと問えば、

浄土真宗は、往相の行信のみならず、如来様がお慶び下さるお悟りの内容までもが回向され、そのまま衆生の歡喜となって下さったのだということになるのではないのでしょうか。

阿弥陀様のお声聞く (なだそうそうの替え唄)

Ref) <http://www.youtube.com/watch?v=8URyaUOoTLE> 替え唄を更に替えております

- 南無阿弥陀仏と称えつつ(ては)、阿弥陀様のお声聞く
- いつもいつもたゆみなく、見守り給う仏様
- 晴れ渡る日も雨の日も、いつもみ名となり
- 煩惱にまなこ障えるとも、たゆみなく照らし給う
- 願いにまかせて 南無阿弥陀
- 法蔵五劫の御苦勞は、ひとへに私のためにあり
- 釈迦出世の本懐も、弥陀の願いを説くが為
- 順境のときも逆境も、唯の信一つ
- 生死の惑いは尽きせねど、あなたの国にきっと往ける
- 願いにまかせて 御念仏
-
- 南無阿弥陀仏と称えつつ(ては)、阿弥陀様のお声聞く
- いつもいつもたゆみなく、喚(よ)び覚まし給う仏様
- 晴れ渡る日も雨の日も、いつも聲(こえ)となり
- 煩惱にまなこ障えるとも、たゆみなく喚(よ)び給う
- 願いにまかせて 南無阿弥陀
- 摂め取り決して捨てぬ、願いにまかせて南無阿弥陀

悪人正機「唯除の御文」

「唯除五逆誹謗正法(ゆいじょごぎゃくひほうしょうぼう)」といふは、「唯除」といふはただ除くといふことばなり、五逆のつみびとをきらひ、誹謗(ひほう)のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。(Ref『尊号真像銘文』註釈版聖典P644)

- ・不思議なことのようですが、十方の衆生を漏れなくお救い下さる第十八願文だけに「唯除の御文」が付されています。
- ・これでは、お救いには例外があるように受け止められます。それでは、ご本願に欠け目ができてしまうのではないのでしょうか。
- ・そこで、親鸞聖人は、銘文でそのお心を御説き下さっているのです。
- ・ご讃題は、第十八願文の唯除の御文についての銘文のお言葉であります。それには「しらせんとなり」が二度までも出て参ります。
- ・親鸞聖人は、二度の「しらせんとなり」で一体、何をお知らせになろうとされたのでしょうか。

五逆と誹謗正法

五逆誹謗正法（ごぎゃくひほうしょうぼう）の中身をお訪ねします

- 「五逆」とは、五種の重罪のことを申します。五逆罪ともいい、又、無間地獄に堕ちる業因であるから五無間業、五無間とも言うとおさえられています(Ref註釈版聖典の巻末注)。
- これには、小乗仏教と大乘仏教とで意味内容に開きがあるのですが、小乗の五逆で申しますと、次のように詳述されます(尚、大乘の五逆は更に拡大します)。
 - 殺父(せつぷ)。父を殺すこと。
 - 殺母(せつも)。母を殺すこと。
 - 殺阿羅漢。阿羅漢(あらかん = 聖者)を殺すこと。
 - 仏の身体を傷つけて出血させること。
 - 教団の和合一致を破壊・分裂させることとあります。
「和合一致を破壊分裂させる」とは、わかり易く表現すれば、さしずめ「**コミュニティを破壊・分裂させる**」こととあります。
- また、誹謗正法の「正法(しょうぼう)」とは、「仏法」、仏さまの教えであり、「誹謗(ひほう)」とは、これをそしることを言います。

みなもれず往生すべしとしらせんとなり (1/4)

本願力廻向の行信の救い

- 大經の第十八願文は、「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲(おも)ひて、乃至十念せん。もし、生ぜずは、正覺を取らじ。唯五逆と誹謗正法とをば除く」であります。
- 第十八願文は、念仏往生の願という願名で示された御心が基礎になっています。
- 浄土には、お念仏一つで往生できる。
- しかも、お念仏は、それ以外の行と異なって、行者自ら功德を積み、積み上げた業績を行者の方から浄土往生の為に回向するには及ばない(不回向)のだと、法然聖人は明らかにして下さったのでした。
- なぜなら、お念仏はご本願に誓われた**正定業**(しょうじょうごう)だったからです。
- これが法然聖人のみ教えでありました。
- この法然聖人のみ教えを受けられた親鸞聖人は、更に一步進めて、「お念仏一つで往生ができる」その本質は、お念仏が阿弥陀如来から**本願力廻向**されているから、凡夫が回向するのではない(不回向)のだと明らかにして下さったのでした。
- 考えてみれば、これは回向の主体の転換と頂戴することができます。
- 法然聖人までは、回向の主体は、行者であった(但し、第十八願文では、既に願文にお誓い下さっているからその例外となる)のに対し、親鸞聖人は回向の主体は、阿弥陀如来になると明らかにして下さったからです。

みなもれず往生すべしとしらせんとなり (2/4)

- しかして、**本願力廻向**とは、阿弥陀如来のご本願が完成されたが故に、ご本願に誓われたお力(本願力)が働いて下さって、仏の方から衆生(私)が受け取り易いように回し向けて与えていて下さるのであります。
- このとき、回向されているものは、唯単に、「南無阿弥陀仏と称える」行為ばかりではありません。
- 称える行為のみならず、実は「念仏しようと思いつ心そのもの」が如来様から回向されているのだとお知らせ下さったのでした。
- 第十八願文の「至心信楽欲生(しんしんぎょうよくしょう)」(これを三心といい、浄土真宗の信心を顕しており、その中心が「信楽」です。
- 「信楽」とは、「如来様のご本願の思し召しに疑いをさしはさまない(「疑蓋无有間雑」)」ことを指します(Ref「三一問答、法義釈、信楽釈」註釈版P234、新全P83)。
- それ故、御念仏する上で、「さようでございますか。如来様の仰せこそまことでございます。それでは、如来様の仰せにおまかせします」という心一つで浄土往生が叶うのであります。
- これが浄土真宗の信心であります。ですので、よく、浄土真宗では信心一つで往生が叶うと言われるのであります。
- けれども、留意すべきは、このときの信心というのは、決して御念仏と切り離してみるべきものではありません。信とは、念仏往生の願に基づき、あくまで御念仏する上での行者の姿に他ならなかったからです。

みなもれず往生すべしとしらせんとなり (3/4)

第十八願文のお救いには自力は無用

- 阿弥陀如来のご本願が完成されて出来上がって下さったお浄土(因願酬報の浄土)に生れるには、如来様のお手許で完成され、行者に本願力廻向(他力回向)された行(御念仏)だけが有効ですから、それ以外の行を手立てとしていたのでは浄土往生は叶いません。
- ですので、如来様は、そのお謂れを「唯除の御文」で明らかにして下さったと窺われます。
- 折角、如来様がお誓い下さり、既にご本願が完成して回向されている行信があるのに、それに背を向け、私のやり方で何が悪いとうそぶきかねないのが自己中心で仕上って居る凡夫の本当の姿でした。
- このときの「私のやり方で何が悪い」とうそぶく姿は、我がはからい(自力)をよりどころとして如来様の思し召しを全部はねつけて居る姿ですから、そのままでは、ついに、如来様のご本願の御救いには与れません。
- ですので、そのようであってくれるなというのが、わがはからい(自力)を抑止する意味での押さえ(抑止門(おくしもん))だと頂戴できるのではなかったでしょうか。
- ご讃題の「・・・誹謗(ひほう)のおもきとがをしらせんとなり。」という親鸞聖人の**第一の御知らせ**はこれに当たるのではなかったでしょうか。

みなもれず往生すべしとしらせんとなり (4/4)

- そのような衆生(私)にも、それと気付かない裡にも如来様の智慧の光明(調熟の光明)が働いて下さり、いつのまにやらお育ての機縁が熟するのです。
- そして「父母を殺した覚えはない」とうそぶいて居た私にも、「人生おかしなことを一杯やって来た。父に心配を掛け、母に悲しい思いをさせたことは、両親の寿命を縮めた行いであったことか」と、自らを顧みるときがやって参ります。
- そしてとうとう、唯除の御文で示されているのは、実は、私自身の本当の姿ではなかったことかと顧みるときがやってまいります。
- そのとき、私は、いかなるわがはからいを以てしては浄土往生が叶うものではないと、如来様にお任せする姿に変貌を遂げます。
- ご讃題の「十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。」という親鸞聖人の**第二の御知らせ**は、ここに本願力廻向の行信により、万人漏れなく御救いに与る道がある(**摂取門(せっしゃもん)**) ことをお知らせ下さっているのではなかったでしょうか。
- 以上のように頂戴してみますというと「唯除の御文」は、わがはからいを捨て、如来様の「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」の仰せに気付かせて戴く秘密の鍵をお示し戴いている御文になるのではなかったでしょうか。合掌

涙君なつかし（慚愧歡喜の涙君）

涙君なつかし なつかし 涙君 また会う日には

- 君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
- 君なしではとても 生きて行けそうもない
- ある日僕は声を聞く 阿弥陀様の声なんだ
- われをたのめとよばふ なむあみだぶと称える
- 涙君なつかし なつかし 涙君 また会う日には
-

涙君なつかし なつかし 涙君 また会う日には

- 君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
- 君なしではとても 生きて行けそうもない
- 声聞くときの私はね 胸の奥から込み上げる
- よろこびの涙君と 出遇いに酔いしれる
- 涙君なつかし なつかし 涙君 また会う日には
- また会う日には また会う日には また会う日には

合掌